

氏 名	なか の まさ ひろ 中 野 昌 宏
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 127 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	起源の論理 ——精神分析学的社会理論への序説——

論文調査委員 (主査) 教授 間 宮 陽 介 教授 足 立 幸 男 教授 新 宮 一 成

論 文 内 容 の 要 旨

自己と他者、個人と社会、部分と全体、あるいはメディアとメッセージ。社会諸科学ではお馴染みのこれら様々な二項対立は文字通りの対立概念として捉えられるのが常であった。その際、一方を優位させれば他方はその影のような存在となるのは避けがたい。例えば個人と社会の二項対立において、個人を優位させれば社会は実体のない名目的な存在となり（原子論的社会観）、反対に社会という存在が個人の上に厳然と存在するという立場をとると（有機体的社会観）、個人は社会の関数として捉えられがちになる。二項対立は2つの社会観・世界観の対立となるのである。

本学位申請論文が目指すのは、AとB、XとYといった2項を対立的に見るのではなく、むしろAがBを規定し、同時にBがAを規定するという、いわば循環構造をなすものとして見ることにあり、そしてこの循環構造をもって社会の成り立ちを見ていこうとすることにある。その際、申請者はラカンの精神分析学を中核に置き、その射程を社会の領域にまで及ぼそうとしている。本論文が「精神分析学的社会理論への序説」という副題を持つゆえである。

論文は緒論と7つの章とから成り立っている。便宜上これを3つのパートに分けるとすれば、(1)問題提起（緒論、1、2章）、(2)ラカン理論とその射程（3、4、5章）、(3)社会理論への適用（6、7章）の、3つに分けられるであろう。

(1)まず緒論において、部分と全体、システムと環境、個人と社会といった2項の循環構造は、その相互規定性のゆえに始点と終点を持つ単線的な因果決定論（モダニズム）の埒外にあること、しかしモダニズムのツリー型思考を批判するポストモダニズムのリゾーム型思考も根を持たない相対主義に帰着することが指摘され、続く第1章で、社会形成論としての秩序問題を手がかりにして、2つの思考方法が「傾性論 dispositional theory」と「懐疑論 skeptical theory」の違いとして定式化される。

傾性論によれば、自然状態を脱して社会ができたのは、人間がもともと社会を創る傾性を持っていたからである。人間は社会的本性（例えばアダム・スミスのいう「交換性向」）を宿し、その傾性が社会形成の原動力になったというのが傾性論だとしたら、懐疑論は、人間は所詮各人各様、このような人間が集まってできた「社会」は確固とした秩序であるかに見えて、その実はそうでない、と主張する。直ちに分かるように、傾性論においては社会が予め出発点に置かれている。他方、懐疑論においては、社会は個人の影としてしか存在しない。つまり両者はニワトリが先か卵が先かという「疑似問題」に対して「疑似解決」を与えているにすぎない。

この点は、マルクスの貨幣生成論（価値形態論）をめぐる幾人かの論者の諸説を検討することによってさらに敷衍され、申請者の問題意識が明瞭な形をとって浮かび上がる。ある論者は、一般的等価物としての貨幣の中にそれを貨幣たらしめる実体（傾性論の傾性に相当する）を見、反対にある者は、貨幣はなんら根拠を持たない、貨幣は人々がそれを貨幣だと思っている限りにおいて貨幣であるにすぎない（懐疑論）、と主張する。前者は「貨幣はXである」と言い、後者の貨幣無根拠説は同語反復的に「貨幣は貨幣である」としか言いようがない。申請者は実体論を否定すると同時に無根拠説も否定する。その際、申請者は、「貨幣は貨幣である」という命題を認めつつもそれを無意味なトートロジーとは考えず、そこに1つの

重要な循環構造を見てとる。この循環構造はラカンの象徴界の構造と相似の関係にある、単なる外見的な相似ではなく、人間—社会という共通の関係軸を持つ内的相似。こうして申請者はラカンの精神分析学へと向かう。

(2)ラカンの象徴界の構造は2つの面、すなわち幼児の発達過程(象徴界に入る過程=社会化)と人間の言語機能の2面から考察されている。

象徴界とは言語・論理・秩序の地平であり、言語以前の世界、すなわち物自体のような世界とは次元を異にする。幼児が社会化する過程は物自体の世界から象徴界へと移行する過程、物自体の如き「エス」が社会化された「自我」を獲得する過程である。この過程はいわば無から有を生じる過程であるが、これがいかにして可能か。ラカンによれば、「語は物の殺害」である。しかし物は殺害され尽くすわけではなく、また、殺害された物も無に帰すわけではない。生と死が一对であるように、象徴界は殺害された物の世界(ラカンのいう現実界)と一对である。申請者の問題関心に照らせば、貨幣無根拠説は、現実界を欠いた象徴界、それゆえ、浮遊する象徴界に他ならない。

いま1つの、ラカンの言語機能論も、申請者によれば、上の点を補強する。われわれは日々、隠喩機能(物を音のような他の物で言い表すこと)と換喩機能(語を他の語で置き換えること)を駆使して言語活動を行うが、ラカンは両者の不可分性を明らかにした。「Fとはなにか?」—「FとはGである」「GとはHである」……というのが換喩だが、この系列には果てがない。しかし換喩が空中を浮遊しないためには、無限の連鎖の果てに究極の隠喩(ポワン・ド・キャピトン)があるとしなければならない。貨幣の無根拠性を断ち切るのも、この究極のポワン・ド・キャピトンである。

(3)最後の2章では、これまでに論じられてきた理論枠をもとにして社会理論に新たな光が当てられる。

第6章は時間論の試みである。ニワトリと卵の循環論は出口のない循環論どころか、かえってその循環を逆手にとることによって、システムの時間的生成を明らかにすることができるのではないか。ちょうど、「飛ぶ矢は飛ばない」として運動を否定してみせたゼノンに対し、「いやむしろ現にある矛盾こそが運動なのだ」としたヘーゲルのように。ここでもまた申請者はラカンを援用し、彼の囚人のジレンマ・ゲーム—囚人は論理のみによって解答を得るように要求されるが、解答を得るためには、囚人は論理の世界を脱し、自らの主観を介入させざるを得ない—を時間論として読み込んでいる。

そして最終章は人工知能論に端を発するいわゆる「フレーム問題」、すなわち「見る前にまず、見るべき物を定めなければならない」、それはいかにして可能か、という問題に言及し、論文を締め括るのである。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、「社会はいかにして可能か」という、人間・社会の学にとって最も根本的な問題を、循環構造の解明という申請者独自の視点から、たとい完璧にとはいかなくとも、粘り強く論じたものとして、特筆されるであろう。

このような問いとしては、例えばジンメル「社会化の形式」論があり、こちらは公共性や公共空間について考える時には大きな示唆を与える。これに対し、申請者の循環構造論は社会の成り立ちや生成を考える上で重要なヒントとなるであろう。

むしろ、本論文に先例がないなどと言おうとしているのではない。ルーマンの「自己言及性」やギデنزの「再帰性」についての議論も本論文と似た問題意識を持ち、申請者もまた彼らの議論に示唆を得ていることは、申請者自身が記している通りである。また、ハイデガーやガダマーらの解釈学における解釈学的循環の問題も本論文への隠れた伏線となっている。しかし本申請論文はこれらの先行研究に示唆を受けつつも、決してそれらに吸収され尽くすことのない独自性を持っている。

第一に、自己と他者、個人と社会、システムと環境といった様々な2項が、「内」と「外」という視点から統一的に捉えられており、そのために、社会科学と哲学、そしてもちろんフロイトやラカンらの精神分析学を、互いに関連し合うものとして理解することが可能になった。本論文では、マルクスの貨幣論、ラカンの精神分析学、そして解釈学的循環論と一脈通じるところのあるフレーム問題などの緒論が、一見すると、無関連に羅列されているように見えるが、決してそうではない。異質の問題が循環構造という串によって串刺しにされているわけではなく、諸学がラカンの精神分析学を核にして有機的に結びつけられ、全体としてスケールの大きな人間・社会理論を構築しているのである。

第二に、人間・社会諸科学の未解決の問題に一定の光を当てることが可能になったことも本論文の重要な貢献である。例えば、論文の中では軽く素描されているにすぎないが、ルソー『社会契約論』における、特殊意志と一般意志との間に見ら

れる齟齬—アルチュセールはルソーの論理構成にこの齟齬を見出している—を循環構造の理論によって整合的に解決することが可能になるかもしれない。ルソーの例に限らず、このような可能性のデッサンを本論文中の至るところに見出すことができる。根底的であるがゆえの、本論文の射程の広さである。

第三は本論文の論法ないしスタイルである。見てきた通り、本論文は理論的・抽象的な問題を論じ、具体よりは抽象の言葉で書かれている。そのため、晦渋で読みづらいところもあるが、理解不可能ではない。語り得ない、あるいは語りづらいことがらになんとか言語的表現を与えようとする点ではポストモダニズムも同じであるが、ポストモダニストが比喻や言葉の置き換えによって、いわば絵画的に思想の図像を描こうとする傾きがあるのに対し、申請者は筋道を立て、論理的に自己の着想を語ろうとする。申請者自身の言葉によれば、「ポストモダニストが戦略的にもしくは自己の理論に準拠した方法で一つまり、わかりにくく—論じてきたことを、彼らの主張に反してあえて徹底的に論理的に語ろうとするのである。

以上、本学位申請論文の学問的意義を見てきたが、不足する点も指摘しておきたい。

申請者は論文中でも指摘している通り、循環構造が時間を生むことによって自閉的な論理の世界をうち破ることを示唆している。だが、この時間なるものはあくまでも論理的時間であって、歴史的時間ではない。循環構造は論理的時間を生むことによって、2次元的な論理空間を3次元的な空間に変えるが、論理的空間であることに変わりない、といえるのではなかろうか。

このような隘路を切り開く一つの道として、デカルトからカントを経てヘーゲルへではなく、カントを経てパースのプラグマティズムへと至る道が考えられる。というのも、人間の行為は内と外、2つの世界を統合したものであり、論理世界を超え出る契機を孕んでいるからである。実は申請者自身、意識することなしにこのような方向を考えている。例えば申請者は、マルクス貨幣論の解釈が論理主義の方向に流れがちであることを指摘した箇所、マルクスの、「人々は考える前にやっている」という言葉を紹介し、論理の自閉的空間を打破するものとしての行為に着目しているのである。「内」と「外」の循環構造、それとともに「内」と「外」をいわば弁証法的に止揚するものとしての行為。この行為と循環構造とがいかなる関係にあるのかを問い詰めることによって、論理主義の隘路が切り開かれるかもしれない。

とはいうものの、こうした問題点は、本論文で申請者が企てた知的冒険に比べると、取るに足りない。多くの関連文献を咀嚼した上で、自らの設定した問題を「論理的」に考え抜こうとする姿勢は高く評価されるべきである。

本学位申請論文を構成する諸章の一部はすでに公表され、学会でも高い評価を受けている。しかも論文の全体は本年中に1冊の書物として刊行される予定である。また本論文は、人間・環境学研究科の基本理念および、人間社会論講座の研究方針にも合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年2月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。